

## 病害虫情報 No. 1

## 麦類赤かび病の防除を必ず実施しましょう！

【防除適期：大麦 = 穂揃期，小麦 = 開花期（出穂後7～10日）】

赤かび病は、麦の収量や品質を大きく低下させる要因となる。また、本病原菌はデオキシニバレノール（DON）等のかび毒を産生するため、農産物検査規格では赤かび粒混入率の許容値は0.0%と厳しく設定されている。品質のよい麦を生産するためには、本病の防除は不可欠である。

## [現在の状況]

4月上旬現在、大麦は県内の一部地域で出穂を認めている。また、小麦の生育も平年より早く、出穂期も早いと予想される（表1）。ただし、播種期や圃場条件の違いなどにより、生育にばらつきが見られるので、麦の生育状況をよく確認する。

向こう1か月の気象予報（4月6日発表）によると、気温は平年並か低く、降水量は平年並と予想されている。

表1 小麦（農林61号）の予測出穂期（農業研究所・4/5現在）

播種期	水戸市		龍ヶ崎市	
	本年（予測値）	平年値	本年（予測値）	平年値
11月上旬	4 / 24	4 / 29	4 / 11	4 / 20
11月下旬	4 / 28	5 / 2	4 / 17	4 / 24

## [防除対策]

本病原菌は、麦の開花期から10日程度の間が最も感染しやすい。この期間に降雨が続き、気温が20以上になると本病の発生が多くなるので、今後の気象に十分注意し、防除を徹底する。

防除適期は、大麦では穂揃期、小麦では開花期（出穂後7～10日）である。麦の生育状況を正確に把握して、表2を参考に適期に必ず薬剤散布を行う。

1回目の薬剤散布後も発病の好適条件が続く場合は、7～10日後に2回目の散布を行う。ただし、出穂期以降1回しか使用できない薬剤（トップジンM水和剤、ベルコート水和剤）があるので注意する。

表2 赤かび病に登録のある主な薬剤（平成19年4月4日現在）

薬剤名	希釈倍数	収穫前日数 - 本剤の使用回数	対象作物	有効成分 - 有効成分の総使用回数
トップジンM水和剤	1,000～1,500倍	30 - 3（ <u>出穂期以降は1</u> ）	麦類（小麦を除く）	フリアネトキル - 3（種子1，出穂期以降1）
		14 - 3（ <u>出穂期以降は1</u> ）	小麦	
ベルコート水和剤	1,000～2,000倍	21 - 3（ <u>出穂期以降は1</u> ）	小麦	ベクタジン - 4（種子1 散布及び無人機散布は合計3，出穂期以降1）
ストロビーフロアブル	2,000～3,000倍	14 - 3	麦類	ケルソール - 3
コロナフロアブル	400倍	- - 5	麦類	硫黄 - 5
チルト乳剤25	1,000～2,000倍	3 - 3	小麦	プロトコール - 5（根雪前2，春期以降3）
	8倍（無人機散布）	7 - 3		
	1,000～2,000倍 8倍（無人機散布）	21 - 1	大麦	

農薬を使用する際は、農薬ラベルに記載の使用法・注意事項等を確認のうえ使用してください。

また、薬剤散布の際は、周辺作物等への飛散（ドリフト）に十分注意してください。